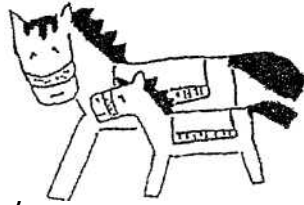


♪  
お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと



24年 1月 NO. 206

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		1月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
1月 7日	土	体験保育 10:00～12:00	お子さんと同じ年齢のクラスに入っ ていっしょに遊びましょう。
1月 13日	金	おはなしの会 10:00～11:30	「お正月」をテーマに12支のおはなしや 手あそびもちつきなどします。
1月 14日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も是非子育て 体験においで下さい。
1月 14日	土	木工教室 14:00～16:00	木製品の修理などもできます。
1月 22日	日	創立記念発表会 9:30～13:00	9時半よりアルファあなぶき小ホールにて 乳児さんも出演します。どなたでも 見においでください。
1月 26日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	砂古口さん(フリーライター)から 宮武外骨さんの話を聞いたり フリートークもします。
1月 27日	金	健康・育児相談 11:00～12:00	小児科園医師にゆっくり相談できます。 (予約要)

<p>・火～金の13時～16時までは、園内開放しています ので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)</p>	<p><b>育児相談(月～土) 9:00～18:00</b> しつけや子育てについての悩み、保育園生活、 入園・見学についての相談もどうぞ。</p>
--	--

香川県高松市御坊町2-2  
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ  
童話全集4  
空のかあさま・下より

「お番」の晩は夜なかでも、  
からころ足駄の音がする。  
更けてお家へかえっても、  
なにかうれしい、ねられない。  
「お番」の晩は夜なかでも、  
からころ足駄の音がする。  
更けてお家へかえっても、  
なにかうれしい、ねられない。  
ただ、明るくにぎやかで、  
友だちやみんなよっていて、  
なにかしないじゃいられない。  
大人はしっとりお話で  
子供は騒いじゃ叱られる。

「お番」の晩は雪のころ、  
雪はなくても暗のころ。  
くらい夜みちをお寺へつけば、  
とても大きな蝋燭と、  
とても大きなお火鉢で、  
明るい、明るい、あたたかい。

報恩講



こどもの成長と共に親も色々な経験を重ねて親らしくなっていきます。子育てのことで心配したり悩んだりすることにより親も成長し、こどもが親らしく育ててくれているともいえます。

今月は夫の育児参加について妻や夫の言い分をご紹介します。

## 夫の育児参加について

京都市内の保育所や児童館で、乳幼児のママ 50 人に「うちの旦那」の子育てぶりを聞いてみた。

育児や家事をだれが一番協力してもらっているかとの質問には、44 人が夫と回答。核家族化のすすむ中、夫への期待は増し、家庭での夫の果たす役割もますます重要になっている。

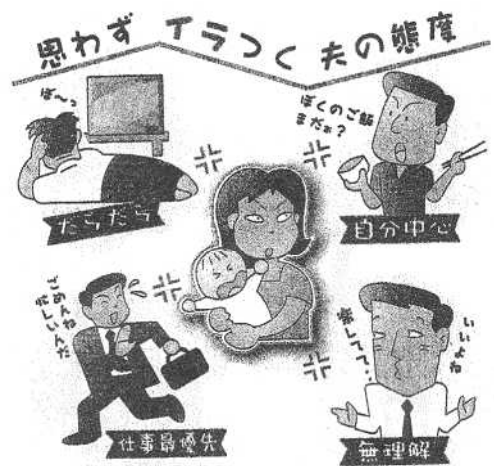
満足度では意外にも、満足しているとの回答が半数以上を占めた。しかし、満足とした母親のなかにも「今の仕事を考えると仕方ない」「時間的には不満」など意見を添える母親がいた。不満はあるが、仕事の忙しさや職場環境のことを考えてあきらめているようだ。

夫のどのような態度や言葉に不満を感じるのだろうか。

大きく分けると

- 家で育児や家事を放っておいてだらだら過ごす
- 「子育ては仕事より楽」「育児は妻の仕事」など無理解な発言
- 仕事中心の生活
- 自己中心的な言動

の4つにまとめられる。この夫の自己中心的な行動の具体例としては「妻の体調が悪い時、妻子の食事ではなく夫自身の食事を心配した」、「テレビゲームに夢中で子どもが泣いても動いてくれない」などがある。



「夫にやってもらいたい育児や家事」では子どもの風呂をあげる人が多かった。母親一人で風呂に入れ、体をふいて服を着せ、さらに授乳となると、赤ちゃんのことだけで精いっぱい。せめて、お風呂ぐらいゆっくりつかりたいという願いが込められている。とはいえ、子どもの風呂の時間に帰宅できる夫は決して多くない。

次いで多かったのは、子供をあやすこと。料理や洗濯など家事をする際はもちろん、母親がひと息つくために、子供を任せたいという意見があった。また、部屋の片づけや掃除、食器洗いなど家事の手伝いも求められているよう。

少数意見として「うちをしてもおむつを換えて」「言わないと行動しない。積極的に自分から動いて」などがあったほか「今のままで満足」と答えた人も4人いた。

夫の気遣いで何がうれしかったか。「無理しないで」「ご苦労さま」といった、いたわりの

一言をあげる人が多かった。「育児や家事は仕事と違う。夫しか自分を評価してくれる人がいない」という意見はごもっとも。

手作り弁当を食べた後「ありがとう」のメールを職場から送ってもらうという人もいた。妻の育児や家事を当たり前のように感じてませんか、お父さん？



また、妻が何も言わなくとも気を利かせてちょっと部屋の片付け、というのも人気が高い。夫がふだん、いかに自主的に育児や家事にかかわろうとしていないかがよくわかる。

## 育児ストレス 悩むパパ

「育児と仕事の両立がうまくできない」父親の子育て参加が増える中、新たな難問に頭を抱えるパパたちが目立ち始めた。長引く不況の影響で増える残業や、リストラ不安など仕事面でのストレスに加え、自分では精いっぱい育児参加しているつもりが妻に理解されず、不満をため込んでしまうケースが目立つ。「板挟み」状態にあるパパたちの現状と処方せんを探った。

「もう、死んでしまいたい」今年5月、東京都内にある精神科のクリニックを訪れた40代前半の会社員の男性Aさんは、医師の前で、思わず男泣きを始めた。

涙のわけは、仕事と育児の両立ができない自分へのいら立ち。技術職で最近、昇進を果たしたが、家では共働きの妻の負担を減らそうと育児や家事にいそしむ毎日だ。

朝、2人の子供を保育園へ送るのはAさんの役目。会社では残業も増え、帰宅は夜9時を回る。途中で残業を打ち切り、帰宅することもあり、仕事ははかどらずイライラが募る。

帰宅後、待っているのは洗濯や掃除だ。平日、Aさんが眠るのは午前2時。「慢性的な睡眠不足」でヘトヘト。おまけに週末は週末で、今度は2人の子供を家の外に連れだし、遊び相手の仕事がある。

ただ、妻も総合職として働いている。買い物や料理、保育園の迎えなどをこなしている手前、自分だけ愚痴をこぼすわけにはいかない。疲れているのに眠れぬ夜が続き、行動が散漫になっていたところに、妻の一言が追い打ちをかけた。「あなたって頼りないわね」

妻からすれば、「夫は今以上にもっと家事分担してもいいはず」と思っているのだろう。だが、「ほかの父親より頑張っている」と自負するAさんにとっては、グサリとくる言葉だった。

都内の大手企業など62社の産業医を務める東京・銀座の小松診療所。ここにも最近育児や家事と仕事の両立に苦しみ、うつ症状を抱え、駆け込んでくる男性社員が増えているという。

働くパパを取り巻く環境の変化はめまぐるしい。企業の合併や組織改編、リストラ…。「仕事面でただでさえストレスが高まっている所に、『子育てしない男はパパじゃない』と言われる。妻に一方的に負担を負わせるわけにいかない、と新たなストレスを抱え込む男性が増えている」と同診療所の精神科医、高橋恵子さんは分析する。

こんなデータがある。臨床心理士のKさんが3年前、小学3年生以下の子を持つ全国の父親650人を対象に実施した調査だ。

子供の送迎や急病を理由に遅刻や早退経験のある父親は71%。そのうち23%が「上司が快く思っていない」と感じ、全体の約2割の男性が「昇給や昇格への支障」に不安を抱いていた。育児参加の意志を持ちながら、職場での関係性に悩む働く父親たちの姿が浮かぶ。

「男は仕事優先」という企業側の意識もストレス源の一つだ。

「育児をする社員を会社は『お荷物』とみていると思い知った」と話すのは、メーカー勤務のSさん(36)だ。4年前の出来事を思い出すたび、悔しさが込み上げると言う。

3つ子が生まれ、3カ月の育児休暇を取った。長女が生まれた時は妻任せだったが、2度の育休を取る妻の負担に配慮した。Sさんがショックを受けたのは職場復帰後の査定評価。「会社に貢献しなかったから」という理由で、最低ランクに落ちていた。「悔しさや怒り、劣等感で、仕事に対する意欲を失い、会社を辞めようと思つた」とその当時の心境を振り返る。

「何でお前が育児をするんだ」「育児休業など男が取る必要はない」-。「男も女も育児時間を！連絡会」(育時連・神奈川県茅ヶ崎市)には上司の無理解や心ない言葉に傷ついた男性の嘆きの声が多数寄せられている。育時連世話人の松田正樹さんは「男性は女性に比べ、社内に育児の悩みを相談できる上司や同僚が少なく、悩みを抱え、孤立する危険が大きい」と指摘する。

では、ストレス軽減のための処方せんはないのだろうか。小松診療所の高橋医師が勧めるのは「サボリ時間の獲得」だ。月1回でも男、夫、父親といった縛りから逃れられる自由な時間をつくる。妻とは「育児・家事をどう分担するかだけでなく、お互いの休み時間をどう取るかも話し合っ」と助言する。

地域で悩みを話し合える「父親ネットワーク」づくりを提唱するKさんは、同時に妻の側にも「自分の尺度だけでなく、夫の尺度でどの程度頑張っているかを評価し、ほめることも忘れないで」と注文する。

もちろん、こうした対症療法に加えて、社会そのものの変化は欠かせない。東京大学大学院助教授の瀬地山角さん(ジェンダー論)は「企業が残業を減らし、午後7時には父親が帰宅できる環境づくりこそが、働くパパの育児参加を促し、父親と母親双方が育児ストレスをためないための第一歩だ」と話している。

(「保育と幼児教育版」2011年12月より)

